

『ドビュッシー：大作曲家の病歴、死因、最後の状況』

伊藤美由紀（2400文字）

ドビュッシーは、1918年、直腸癌で55歳の音楽人生の生涯を閉じる。1914年、第一次世界大戦が勃発したことに衝撃を受け、同時に健康をますます損ねる。1915年冬には、癌と診断されて手術を受ける。亡くなる直前までに書かれた晩年の作品、作曲活動について振り返ってみる。

1915年に、2台のピアノのための《白と黒で》、ピアノの為の《12の練習曲》、ピアノと独唱の為の《もう家のない子供たちの降誕祭》、そして、3作品のソナタ《チェロとピアノのためのソナタ》、《フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ》、《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》の晩年の重要な6作品が書かれている。書かれた作品の年代順に追って、考察してみる。

1914年に第一次世界大戦が勃発した際、ドビュッシーは愛国心に燃え、悲惨な状況に打ち拉がれ、作曲から1年近く離れていた。残虐な行為をくよくよと考えて臆病に過ごすのではなく、自分の能力を生かし、創造活動によってフランス文化を支えたいと、再び作曲意欲を見いだす。3曲からなる《白と黒で》により、作曲活動に復帰する。この作品については、ベラスケスの灰色のようなもので、ピアノの響きからその色彩と感覚を引出していると、語る。戦闘の重々しい暗さと、平和への前向きな想いが感じられる、色彩豊かな音響で構成されている。

《12の練習曲》は、2巻からなる全12曲によるピアノ練習曲で、ショパンに献呈されている。ドビュッシーの尊敬するショパンかクープランのどちらに献呈しようか悩んだ末、当時、デュラン出版社から依頼されていたショパン全集の楽譜を校訂する仕事を引き受けていたことも重なり、ショパンを選ぶ。第2曲《3度のための》、第4曲《6度のための》、第5曲《8度のための》は、ショパンの《練習曲作品25》の6、8、9、10番を、また、第7曲《半音階的な音程のための》、第11曲《組み合わせられたアルペッジョのための》は、ショパンの《練習曲作品10》の2、1番を連想させ共通性がある。この他にも、装飾音符、対比音、4度、反復音を含んだ練習曲が含まれている。ピアノという楽器の可能性を拡大し、多彩な音色の響きを探求している。楽譜の冒頭には、指使いを書かなかった理由を述べている。指使いを強制しても、人によって手の形が違うので、全ての手にふさわしいとは思わない。各々の指使いを

探して欲しいと言及している。12作品では、全音音階、教会旋法、複調、多調、無調に近いものまで含み、ルバート、リタルダンド、アツチェルランドなど、目まぐるしく変化するテンポ、ppp から fff までの幅広い音量変化、これらの音楽的な要素が、広範囲に渡ってコントロールされ構成されている。

1915年夏に、純粹に伝統的な形式に戻ることを決断し、『様々な楽器の為の6曲のソナタ』を書くことを計画する。ドイツの伝統的なソナタ形式で書くことはせず、クーブラン、ラモアの時代のフランス17、18世紀の古典的組曲である自由なソナタを想定して作曲する。デュラン出版社の楽譜の表紙には、「クロード・ドビュッシー、フランスの音楽家」と、わざと強調して署名がしてある。その1作目は、《チェロとピアノのためのソナタ》である。その頃、「死が周りを彷徨していた」と手紙で書いている。全楽章を通して、チェロの抒情的で官能的な旋律は、生への呼びかけのようでもある。2楽章では、暗闇を駆け抜けるような、ギターのような音色をピッチカートで、夜のセレナードを奏でる。2作目の《フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ》は、このシリーズ作品のなかで、規模が一番大きい作品である。最初は、管楽器の中では特殊な音色をもつオーボエの使用を考えていたものの、ヴィオラに変更する。フルートとハープの間を取り持ち、弦楽器の中で主役ではないが、重厚な音色と落ち着いた響きをもつヴィオラが、この編成をうまく引き立てている。又、グレゴリオ聖歌、フランス民謡などから影響を受けており、楽器によるヴォカリーズが見受けられる。

その後、病状は更に悪化し、冬には手術を受けることになる。その手術の前日に、彼自身が書いた詩を用いて、《もう家のない子供たちの降誕祭》を作曲する。戦争への抗議のテキストであり、音楽は悲痛に訴える。調は、イ短調の主和音に始まり、イ長調の主和音で終わるが、歌の旋律は、イ音を中心とした旋法的な響きである。

手術後、痛みを耐えながら療養をし、1916年に入って6曲のソナタの3作目であり、生涯において最終作品となる《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》を書き上げる。最後のソナタは、苦しみの中、度々中断されながら、何ヶ月もかけて1917年に書き終えた。瀕死の人間の生きることへの叫びにも聴こえる。終楽章では、第1楽章の最初のテーマが変形して現れ、ヴァイオリンの最低音から最高音となるC#まで使用しヴァイオリンの全音域を最大限にいかしている。この楽章は、自分の想いを音で表現できるまでに、何度も改訂をしている。

最後の作品になるかもしれないとの思いがあったのかもしれない。本人のピアノ演奏により、1917年5月に初演されたのが、ドビュッシー最後の公での出演となった。

その後、ソプラノ独唱、合唱、オーケストラの為の愛国的な作品となる《フランスへの頌歌》を計画し、書き始めていたが、未完の草稿が残るに至った。6曲のソナタシリーズも、第3曲目のヴァイオリンソナタが最後となり、4曲目のオーボエ、ホルン、クラヴサン、5曲目のトランペット、クラリネット、バスーン、ピアノ、6曲目のコントラバスを含むアンサンブルという意欲的なアイデアを残したまま、1918.3.25に亡くなるまでのおよそ10ヶ月間、パリの上空での爆撃音を聞きながら、沈痛な日々を過ごした。遺骸は、パリのペール・ラシューズに葬られたが、後にパッシーの墓地に移された。